

学びの風便り

リーディングスクール通信66 R8.8.31(月)



発行：松本市教育委員会 教育研修センター

学びの改革のあゆみ 旭町中学校・菅野中学校

旭町中学校～生徒が主役に！旭町中学校「キャリアフェスティバル」～

旭町中学校では、2年生で「職場体験」を行います。これまで、職場に赴き体験を中心に行ってきました。しかし、世の中の多様な仕事から自分に合うものを選ぶには、まずどんな仕事があるかを広く「知る」ことが大切です。そこで、多様な仕事の魅力や働く大人の生き方に触れ、興味を広げるイベントとして本フェスティバルが企画されました。今回はその様子を、先生方の言葉や生徒の感想とともにお伝えします。

大人たちの想像を超える、生徒たちの自主的な運営

最大の特長は「生徒主体の運営」です。リーダーを募ったところ、締め切り前に32名もの生徒が名乗り出てくれたそうです。ゲストを迎える「接待係」は、お礼のメッセージを添えたお菓子を用意し、お



茶を出すタイミングまで自分たちで考えて行動しました。また、進行を仕切った3名の女子生徒はリハーサルから時間管理を徹底。本番で「講師が多すぎてステージに乗り切らない！」というハプニングが起きても、慌てず臨機応変に対応しました。「特別なネームタグを胸に、誇りをもっていきいきと活躍する姿には、目を見張るほどの成長が見られた」と学年主任の鎌倉先生は語ります。

先生方の関わり方——「信じて任せる」と「安心の土台」

この自主性を引き出すため、先生方は細かな指示を出さず、伝えたのは「いつまでに何を準備するのか」という期限（ゴール）だけ。生徒たちはそこから逆算し、アイデアを出し合って自由に準備を進めました。その代わりに先生方が行ったのは、当日の動きをシミュレーションし、周知したことです。この「安心の土台」があったからこそ、生徒たちは本番で焦らず、責任を持って行動できたようです。



生徒の感想

Sさん：初めてリーダー役に挑戦し、最初は慣れずに苦労しました。言葉遣いなど実践して初めて見えた課題もありますが、社会では人と良い関係を築くことが何より大切だと強く感じました。この経験を将来に生かしたいです。

Tさん：クラスの枠を超えて仲間と協力し、一丸となる楽しさを実感しました。特に医療の発表を通じて看護師への憧れが強まり、コミュニケーションの大切さについても視野を広げることができました。

これからのキャリア教育に向けて

「一度にたくさんの企業や仕事を知り、視野を広げられる」という大きな手応えに対し、「1年生で仕事を広く知り、2年生で職場体験に行くステップにすれば、さらに深い学びになるのではないか」と大堀先生は語ります。「信じて任せる」ことで、子どもたちは驚くほど頼もしく伸びていきます。

旭町中学校のこの挑戦は、これからの生徒会行事や日々の探究活動への広がりを感じさせてくれます。

菅野中学校 生徒も教師も主体的に学び続ける学校へ

菅野中学校では今年度、学校づくりのテーマとして「主体的に学び続ける生徒の育成 ～問いから問いを生み出す授業づくり～」を掲げています。先生同士が温かくつながり合うことを大切にし、共に学び合いながら歩みを進める菅野中学校の1学期の取組みをご紹介します。

■ 何気ない対話から育む、気楽に学び合える関係性

学校づくりの最初の一歩として大切にしたのは、「先生同士のつながりを深める」ことでした。5月27日には、第1回 SLS(菅野ラーニングセッション)として「研究出発の会」を開催しました。冒頭、白井研究主任がファシリテーター役になり席替えを交えながらアイスブレイクを行うと、会場は笑い声が広がる温かな雰囲気になりました。続いて、研究テーマである「問いから問いへ」の授業づくりと1学期のロードマップが示され、日常の授業実践を教科内で共有する「見合 week」が提案されました。これは、日頃の気軽な学び合いを大切にしながらアイデアを出し合い、お互いの実践から学び合う取組みです。各教科では「見合 week」でどんな授業ができそうかを和やかに語り合い、これからに向けた見通しを共有しました。先生同士が対話を楽しみながら関係を深め、気楽に学び合える土台を築く、有意義な時間となりました。



■ 教科内で互いのよさを学び合おう「見合 week」

7月初旬、「見合 week」の一環として若手の北原先生が授業を公開しました。「4種類の白い粉末の正体を見分ける実験方法を調べよう」という学習課題のもと、生徒自身が実験計画を立て、結果を基に考察する探究的な理科の授業です。当日は理科教科会のメンバー中心に参観し、「生徒の様子を見守り、困った時に初めてそっと支援する北原先生の『待つ姿勢』が素晴らしい」など、生徒の姿を通した学びがたくさん語られました。北原先生は「授業をやり本当に勉強になりました。次への改善点も見つかり、また挑戦したいと意欲が湧きました」と充実した表情で話されました。生徒自身が主体的に実験へと向かい、教師も自らの授業を開いて高め合う。お互いのよさを認め合う、協働的な学び合いの場がここに実現しました。



■ 全員でつくるフラットな学び合い ～ 一人一公開授業への挑戦 ～

7月15日には第2回 SLS が開催されました。今回も心を通わせる「おしゃべりタイム」からスタート。その後、2学期の研究の柱となる「一人一公開授業」について説明がありました。ねらいは「問いから問いへ」の授業に挑戦し、そのチャレンジに対して「それ、面白いね」と互いに認め合うフラットな学び合いをつくることです。1学期の「見合 week」の振り返りに続き、公開授業に向けた教科ごとの相談タイムになると、数学科から「数学では『問い』という言葉あまり使わないため、どう具現化すればよいか悩んでいる」という切実な声が上がりました。これを受けて白井研究主任と教頭先生、数学科のメンバーによる熱い対話が始まりました。「一つの問題が解決したとき、『これだったらどうなるだろう?』と新たな疑問や予測が生まれること。自ら問題を解決しようと主体的に学び続ける姿こそが、テーマに通じるのではないか」。熱心な議論の末、そんな気づきに至りました。自分の教科におけるテーマのあり方を誠実に突き詰める姿は、まさに「主体的に学び続ける教師」そのものです。他教科でも終了時刻が過ぎても熱い語り合いが行われていました。



「どう授業に具現化するか」を語り合い、共に高め合う菅野中学校の挑戦と学び合いの輪は、2学期に向けて広がり続けていきます。